土器・瓦 44

東から来た弥生土器
－烏丸綾小路遺跡の調査から－

http://www.kyoto-arc.or.jp
（公財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

写真１　烏丸綾小路遺跡出土の内傾口縁土器と厚口鉢（下段中央が厚口鉢）

はじめに　烏丸綾小路遺跡は、京都盆地を代表する弥生時代の遺跡です。2017 年から 2018 年にかけて元醒泉小学校の敷地内で、京都市立下京雅小学校の校舎を建設する工事にともなう発掘調査を行ないました。調査の結果、市内で初めて弥生時代前期末葉から中期前葉（紀元前４世紀から２世紀頃）の集落・水田・川跡が見つかり、遺物整理箱で 200 箱を超える弥生土器が出土しました（写真２）。

見慣れぬ弥生土器　出土した土器を詳しく調べたところ、そのほとんどが京都盆地周辺で作られたものとわかりましたが、50 点ほどの見慣れない特徴を持つ土器が見つかりました（写真１）。

これらの土器は、内傾口縁土器や厚口鉢と呼ばれる土器です。小破片に割れているため全体の形は

写真２　弥生土器が出土した川跡（南から）

よくわかりませんでしたが、他の遺跡の事例から、内傾口縁土器が洋樽形、厚口鉢が火鉢形の器形と考えられます（図１）。アカガイのような放射肋が発達した二枚貝の貝殻の縁を、土器の表面に当てながら引っ掻くことで生じた粗い筋状の凹凸（条痕）を残す土器が主体を占めます。土器の胎土は火を受けたことで赤く焼け爛れ、劣化していました。

土器のふるさと　この時期に京都盆地周辺で作られた弥生土器は、土器の表面を木の割板の端で引っ掻いた痕（刷毛目）を残すものが一般的であり、貝殻の条痕を残す今回の土器は異質です。そもそも、土器の表面に粗い条痕を付けることができるほど放射肋が顕著な二枚貝は海辺に生息しており、今回の調査でも二枚貝は出土しませんでした。こうした土器作りに用いた工具の違いから、出土した内傾口縁土器と厚口鉢は、京都盆地とは別の地域で作られていたものと考えられます。

図２は内傾口縁土器と厚口鉢が出土した遺跡の分布を示したものです。特に愛知県西部に分布が集中していることがわかります。貝殻による条痕は、愛知県西部を中心とする伊勢湾沿岸域の弥生土器では一般的な特徴です。また、内傾口縁土器と厚口鉢の祖型と考えられている縄文時代晩期末の土器（図１：烏帽子型深鉢）が、知多半島西北部周辺で出土しています。今回出土した内傾口縁土器と厚口鉢は、愛知県西部の伊勢湾に面した地域で作られ、京都盆地まで運ばれてきたと考えています。

土器の使い方　遠く離れた伊勢湾沿岸域から、なぜわざわざ京都盆地までこれらの土器が運び込まれたのでしょうか。それは内傾口縁土器と厚口鉢の用途が関係しているのかもしれません。まだ研究途中ですが、今回出土した土器の、①強い火を受け胎土が赤化・劣化している、②粉々に砕けているなどの特徴は、①は海水を煮詰めるため煮炊きする、②が土器を破砕して内面に付着した塩を取り出すといった製塩土器の特徴と共通しています。また、祖型となる烏帽子型深鉢も製塩との関連が想定されています。これらの土器は、海が遠い京都盆地の人々にとって貴重な塩とともに持ち込まれた可能性があるのです。

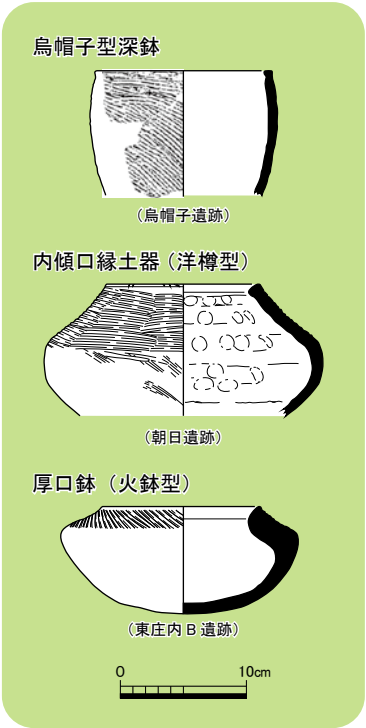

図１　内傾口縁土器・厚口鉢

おわりに　内傾口縁土器と厚口鉢が 50 点以上出土した事例は、愛知県朝日遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡遺跡、滋賀県小津浜遺跡などのように、地域の拠点となるような遺跡でしか認められておりません。今回出土したこれらの土器は、見栄えこそしないものですが、弥生時代の烏丸綾小路遺跡が京都盆地において拠点的な集落であり、遠隔地からの品物がここに持ち込まれていたことを我々に教えてくれる貴重な資料といえるのです。

（中谷正和）

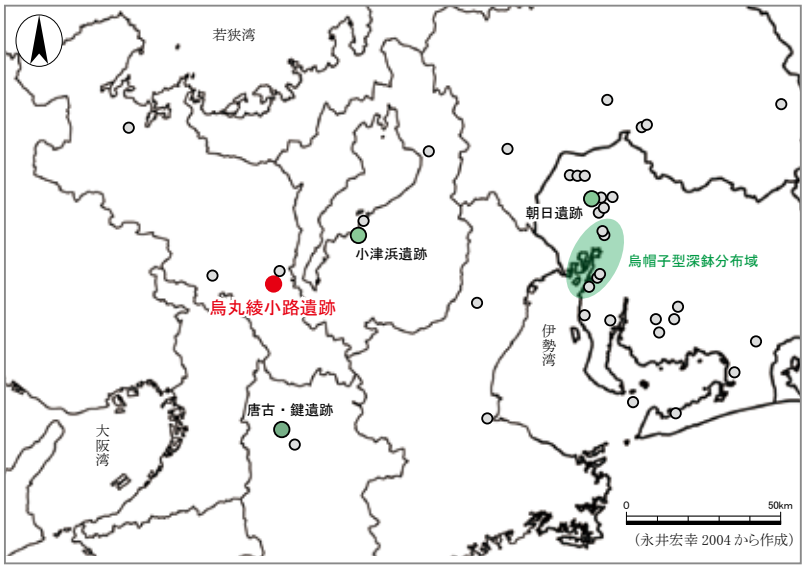

図２　内傾口縁土器・厚口鉢出土遺跡分布図

参考文献：永井宏幸　「内傾口縁土器から厚口鉢へ　～伊勢湾沿岸域から持ち運ばれた土器～」『考古学フォーラム』16 2004 年